

## ここが IAMAS であったら信じられるのに I could believe if I'm in IAMAS (tentative)

三原 聡一郎  
MIHARA Soichiro

IAMAS 在学中に実感して、今現在も度々覚える2つのことを書き記そうと思う。同期や先輩後輩達が同じ感覚を得たかはわからない。ただ卒業後も、この2つだけ、ふとした瞬間に世界のどこに居ても、IAMAS らしいと倒錯した感覚を覚えてしまうのだ。まるで未来を予測した世界の縮図であったかのように。2つは時間を越えているし、学ぶ場を越えて生きる環境としての普遍性を感じている。なお僕は卒業後も一個人として芸術を実践している立場だが、芸術を越えて自分に染みついているこの感覚の共有を試みることは僕が IAMAS を語るきっかけとして、この上ないことだと思っている。

1つ目は、入学最初の1週間目で突然、強烈に訪れる。現在も同じかたちで存在するかわからないが、「モチーフワーク」という名称でのグループワークのプロセスで実感する。5, 6名のグループを初見の全入学生達でつくり共同作業から発表までを行う授業だった。僕の年度のテーマは確か「大垣のマップ」をつくることで、詳細なテーマもアウトプットの方法も全てチームに委ねられていた(と記憶している)。

制作の前に、まずお互いを知ることから始まる。初対面だし、歳も分野も違うし、新しい環境に皆、緊張している。偶然、共通の知り合いが居たり、過去に同じイベントに参加していたり、興味を持つきっかけがみつきながら、グループワークは進む。あるプロセスまでは互いに気を使っていたり、我慢して流すことで共同作業は成立するが、いざ何かチャレンジを試みたり、全体を修正する必要に迫られると、それが表出してくる。僕のチームは全員ネイティブの日本人なのに各メンバも日本語のニュアンスのズレの大きさを実感し始める。先生のアドバイスを理解するのに? 過ぎてベ切りへの時間的リミットにより理解を諦める。などなど、小さなズレの蓄積が発露し、その後は熾烈を極める。最終的に完全に崩壊するグループもあったけれど、最後までどんなかたちであってもまとめるという意志は貫ぬかれていたと思う。いつかわかってくれるという前提ではなく、わかりあえない者同士として対話し、ギリギリまで探る。有限なこの世界で人間は真にわかりあうことはない。このことをひしひしと感じた。

モチーフワークはアプローチが自由なだけに、中間発表などで、他のグループの状況を知ることが、とても新鮮であった。内容については、究極は法に触れること、もしくは身体的な危険の伴うこと以外は全て可能であると思えてくる。また発表自体を俯瞰して、個々のメンバの役割がみえるグループと、そうでないグループはよくわかった。IAMAS には、何かの分野で熟練した人や、教職についていた様な人も学生として集まるのだが、ただしプロセスを遂行するうまさや発表物のテーマ選定やクオリティは一致していないように思えた。全

員についてゼロリセットされた環境においての純粋な力量が表されていたと思う。

2 つ目は IAMAS 全体に流れる時間で形成されていることのように思えるが、それに気づかせてくれるきっかけもモチーフワークであったと思う。他者とのコミュニケーション方法として、言葉、体験、物質などの要素が使われるが、フィールドを超えた人達が持つ各人の多様なバランスのグラデーションを知れることである。自分の弱い部分を知れたり、自分では十分と思っていたものが他の分野では最低限のクオリティであったりする。隣の芝は青く感じるが、これら要素について黄金比も個別に完結するテクニックも無いだろう。レトリックで終らず、手工芸の病を脱し、表面的な笑顔でことを終えることなく、ただその時に向き合って、必要な要素で試行錯誤する以外に方法はないのだと感じた。当時も今も僕は自分のことであっても言葉として理解出来るタイミングは常に時後で、そもそも言語化することに時間がかかる。僕は同期や先輩後輩、そして先生達の言葉の使い方を色んな状況で新鮮に聞いていたし。逆に言葉を主として扱う人達には、僕が作品の前で言葉に詰まっていたり、逆に少ない言葉を補う何かを体験やモノ自体から感じ取ってくれたかも知れない。常にバランスを取り続けることで自分でも全体を改めて理解していけると思っている。言葉使いがうまい人に今でも懂れるけれど、有能な人が世界を記述してくれればよいと思っている。僕は自分が芸術を実践する立場として言葉になる前の現象や感覚、体験をつくろうとより意識し、体験者が自分自身の言葉で語り始める未だ名前のないものをつくれればなと思っている。

上記二つは、常に新しい状況にさらされる現実から目をそらさず、一個人の足下から考え実践する為の方法だと思っている。

僕は芸術の実践として、いまここでしか起きることのない感覚を探している。また同時に僕は数十年という単位よりも長い長いスパンで未来の芸術を夢想しているのだが、世界認識の前提として悲観的ではなく、人間はこれから更に反映するのではなく、滅び始めていると考えるほうが自然だと感じている。テクノロジーの進歩は、これまでの問題を解決する目的で進みつつ、更に複雑な問題を複合的に発生させている様に思える。反対に細胞のリプログラミングなど、かつての価値観を覆すことが可能になってきている。その速度に法律はもちろん倫理観や目の前の一瞬の感覚自体追いついてないのかも知れない。このような時に一体どのような芸術が可能なのだろうか？既に人間が人間に向けた芸術の意義は消費財を生産する職能を越える価値は無くなってきていると感じる。僕は近い未来に人間自体をも相対化する必要に迫られる時が来るような気がする。人間中心の価値観から生まれたものをデコードし、世界を全体で捉える視点が必要になってくると思っている。更に科学技術の進展は、他の生命体への理解を深め、地球外生命体との遭遇可能性であっても微々たるものだろうが上がっていると感じている。種としての新しいコンタクトの可能性も確実に増えている。好奇心の強い人間はその時に挑戦していくだろう。どのレベルを原点としてゼロリセットし、新たな対話が構築ができるのだろうか？原点は可能性の始まりであるし、アプローチ自体がメッセージになるだろう。人間であってもそうでなくても究極の他者である何者かと共有可能な方法を考えることは芸術として当然であるように気がする。芸術が他の何よりも自由であると信じるならば、そんなことを少し真面目に考えてみても良いのではないかなと思う。そして、いざその時が来たら、「いまここが IAMAS であったら信じられるのに」という軽口をとばそうと思っている。